

五感を通して感じるリアルな活動の中で、多様な表現方法を保障し、 気付きの質を高め、認識力の土台を養う。

上田 恵

幼児期から学童期への移行期である低学年において、「自立への基礎」を養うためには、リアルな活動・体験を積むことが大切である。また、体験したことをさまざまな方法で表現することで、友だちと気付きを共有したり、自分の気付きを確かなものにしたりとできる。多様な方法によって表現されたものの言語化を助けることで、言語能力を高め、個別の対象に対する認識力を深めることができる。

本実践は、上記の仮説に基づき、秋の食材を教材として、身近なものへの気づきの質を高めることを目指したものである。

キーワード： 食育、季節、秋探し、秋カレー、季節とくらし

1. 研究目的

幼児期から学童期への移行期である低学年において、「自立への基礎」を養うためにリアルな活動・体験を積むことが大切である。

また、体験したことをさまざまな方法で表現することで、友だちと気付きを共有したり、自分の気付きを確かなものにしたりとできる。

多様な方法によって表現されたものの言語化を助けることで、言語能力を高め、個別の対象に対する認識力を深めることができる。

これらの仮説を立て、「五感を通して感じるリアルな活動の中で、多様な表現方法を保障し、気付きの質を高め、認識力の土台を養う。」を、個人研究テーマとする。

1. 1. 季節を感じる学習

生活科では、一年間を通して季節の移り変わりについて学習する。自然の変化、人々の様子やくらし、町の風景など、季節の移ろいに合わせて変わっていくさまざまな様子に気づき、季節に合わせて人々がどのように暮らしているのかを学習してきた。本単元は、大単元「秋を見つけよう」の中の一つとして位置づける。

秋は、「読書の秋」「芸術の秋」「スポーツの秋」などと形容されるが、その中でも「食欲の秋」に注目し、秋の食材を使って秋を感じるおいしい秋の料理のプラン作りをする。

1. 2. 秋の食材

日本には四季があり、自然の様子の移ろいに合わせて人々は暮らしを工夫してきた。夏は涼しく、冬は暖かく暮らす工夫、季節に合わせた服装、年中行事など

である。そんな暮らし方の工夫の中で、季節に合わせた食の工夫は中心的な位置を占めるといっていいだろう。

店頭には、一年を通して同じ野菜が並ぶ現在ではあるが、農業がさかんな本県は、店頭を見ても旬の食べ物が感じられる。

秋探しをする中で、自然の様子のみならず、人々の暮らし方にまで気付きをひろげるため、食に注目した秋探しをする。給食の献立には、「夏野菜カレー」「秋いっぱいシチュー」など、季節感を感じるものがあり、それとも絡めながら、「秋」を感じる献立作りをさせる。秋と食のつながりに気付いた子どもたちは、やがてやってくる冬も、冬に合わせた食があることに気づき、季節と人々の暮らしの関わりに気付くことが期待される。

2. 研究方法

秋は、収穫の秋、食欲の秋などといわれ、季節感のある食材が楽しめる季節である。そこで、「秋」をテーマにした料理を考える。ベースになる料理は、子どもたちが大好きでかつ、さまざまな食材を使うことができるものを子どもたちと一緒に考える。

ベースになる料理が決まったら、それに使う食材をグループで考える。テーマは「秋」なので、秋の食材を使うことになるが、そこで、その料理に使うよりもそのまま食べた方がいい食材や、秋ではないけど、皆で考えた料理に入りたい食材など、食材ごとの特徴にも注目させ、気付きの質を高める。

みんなで作るおいしい秋の料理について、グループで話し合ってみる。そして、グループで考えたおいしい秋について、その理由やアイデアを交流し、実際

に作りたいのはどれか考える。

その後、決まったものを保護者による生活科ボランティアの協力を得て、実際に調理し、みんなで食べて、食への意欲の向上につなげる。

2. 1. 季節学習

季節学習の一つとして、栽培学習に取り組んだ。春には、ナスやピーマン、トウモロコシ、キュウリなどを植え、水やり、草抜きなどの世話をし、収穫を楽しんだ。

野菜が苦手な子どもが多く、給食時には野菜の残食が多い状況であったが、収穫した野菜には愛着があり、学級園で育てた夏野菜は、食べることができた子どもが多かった。

また、捕まえた虫を放置せず、世話することができ、季節ごとに見つかる虫の種類が違うことなどにも気付いた。

そこで、季節の移ろいの様子と人々の暮らしをつなぐ活動が可能ではないかと考えた。野菜嫌いが多く、小食な子どもが多いこともあり、もっと食に意欲的になってほしい願いをこめて、食育につながる題材を選んだ。

2. 2. 学校提案と表現について

学校提案「問い続け、学び続ける子どもたち ～子どもの言葉でつくる授業～」では、子どもの言葉を、「子どもが表現することのすべて」であるととらえ、子どもの「言葉」で授業をつなぐことを提案している。

子どもの生活の全てを対象とし、五感で感じ、さまざまな表現方法で表現することで、気付きを深め、個別的な事実の認識力を高める生活科においては、文字や話し言葉のみならず、絵、動作、活動の跡が残る成果物等、表現の全てが子どもの言葉である。言語による表現が未熟な低学年は、「見て見て」と言って、動作や成果物、発見したものなどを見せることで、気付きを伝えようとする人が多い。そのような気付きの反応や、気付きを伝えようとする表現を大切にみとり、授業を組み立てる。

同時に、子どもの多様な表現から言語化を図り、いわゆる「言葉」数を増やすことで認識力を高めるようにしたい。

3. 授業の実際

3. 1. 「秋の食」の学習で育てたい力

◎秋の自然やくらしの様子に興味を持ち、すすんで秋の料理のプラン作りをしようとする
(生活への関心・意欲・態度)

◎おいしい秋作りを通して、秋になると多く食べられる食材があることや、食材に合った食べ方があるこ

とに気付く(活動や体験についての思考・表現)

◎秋の自然の様子と人々の暮らしにはつながりがあることに気づき、自分の生活と季節のつながりに気付く

・季節と人々の暮らしのつながりは、家庭や個人によってそれぞれ違う良いところやある事に気付く
(身近な環境や自分についての気付き)

3. 2. 秋を食べようの授業

3. 2. 1. 単元に入る前に

◎1学期の6月26日月曜日、授業参観 生活科
「夏野菜と仲良し」 神山栄養教諭とTT

学級園で栽培している夏野菜を中心に、クイズや、家庭でどんなふうにして食べるのが好きかなどを発表し合った。苦手意識の最も高いゴーヤを、本校栄養教諭がゴーヤチップスに調理し、保護者や子どもたちが試食をした。

その後、ゴーヤチップスを作ってみたという家庭からのお知らせが続き、野菜嫌いの子どもや保護者の間で「きゅうりと少し仲良しになりました」「ゴーヤと仲良しになりました」と、「夏野菜と仲良し」という言葉がよく使われるようになっていた。

◎給食で季節探し

9月の「夏野菜カレー」では、どんな夏野菜が入っているか、10月の「秋いっぱいシチュー」では、どんな秋の食べ物が入っているかなど、給食の季節メニューに注目し、食材や隠し味などを見つける取り組みを続けている。

3. 2. 2. 秋探し

2学期になってすぐ、秋探しを始めた。まだ暑い中だったが、7月にはたくさんいたチョウやバッタの数が減り、大きくなったカマキリやコオロギが増えてきたこと、イチョウの木の下にギンナンが落ちていること。アゲハが集まっていた「アゲハの木」に花がなくなり実になってしまったので、アゲハが集まらなくなったこと、学級園のサツマイモが少し土から盛り上がり顔を出していることなどを見つけた。

また、家でのからしを振り返ると、寝ている時に夏は布団を蹴っていたけど、今は朝までかぶっていることや、そうめんなどの冷たい食事が減ってきたこと、長袖を着ることがあることなど、暮らしぶりの変化にも気が付いた。

3. 2. 3で見つけた秋の食材を交流しよう

秋探して気が付いた食生活の変化に注目し、スーパーマーケットで秋探しをした。その時、見つけた秋を

交流した。

・スーパーマーケットで秋探し

校内での秋探しを終え、近隣のスーパーマーケットに見学に出かけた。

発見したこと

秋をテーマにしたお菓子ワゴン・・・「サツマイモ」「栗」などを使ったお菓子

普通のお菓子のパッケージがハロウィン仕様になっていること。

チョコレートの種類が多い・・・「夏は暑いから溶けるんや！」

シチューカレーコーナー・・・「秋になると寒くなるから、温かい料理が多くなるんや」

鍋のつゆ 鍋のつゆの素コーナー・・・「寒くなるから、

シチューとかと同じや」

「秋の味覚」というのぼりやポップ・・・「秋」という漢字を見て、それを手がかりに探せばいいという発見。

造花の紅葉や柿、栗・・・「秋っぽく飾ってる」

ペットボトルに紅葉のイラスト

お彼岸のお供え物・・・「おじいちゃんとかへお供え持って行ったよ」

パン屋さんの芋栗コーナー・・・サツマイモや栗を使った焼き立てパン。

秋の味覚のお総菜やお弁当・・・栗とマツタケご飯

「ボクのお弁当も栗ご飯やった」

造花の紅葉や柿、栗

秋の果物いろいろ・・・果物コーナーが広く、ブドウやリンゴ、梨、栗等の種類が多かったので、「果物いっぱいやなあ」

ハロウィンコーナーや鍋つゆコーナー・・・「松源にもあった」

肉コーナーは、秋らしさが少ない・・・「秋の肉はないんやなあ」

・番外編 秋の弁当

本校では、毎週木曜日をお弁当の日としている。そこで、保護者の方に、「お弁当に秋の食材を何か1つ入れてください」とお願いした。



図1(左) 図2(右) 秋の食材入りの弁当

3. 2. 4. 見つけた秋を制作活動

第2次 秋の食べ物を絵に書いたり工作したりしよう

(図画工作科4時)

・見つけた秋を絵に描こう (2時)

スーパーマーケットで見つけた秋の食材を、見つけたよカードを見ながら、グループで絵を描いた。グループで四つ切り画用紙1枚に書いたもので、自分が見つけたものを視覚化し、友だちと共有化した。友だちが見つけたものを「なぜチョコレートが秋なん？」等とたずね、「だって夏は暑いから溶けるもん。いっぱいチョコレートあったで。」などと説明し合っている姿があった。

ただし、自分だけしか見つけていなかった食べ物は、友だちから「秋ちゃうで。」などと言われ、書くのをやめてしまう場面もあった。そのため、新米でつくられたお菓子などは、描かれなかった。

・食べ物を紙粘土で作ろう

絵に描くのはとても楽しそうだった。授業の2時間だけでは足りず、休み時間や、課題が終わって空いた時間などに「秋の食べ物の続き書いていい。」と自分から書き始めるほどだった。そこで、食べ物の形や大きさ、色にもっとこだわってほしいと考え、紙粘土で制作した。グループで、

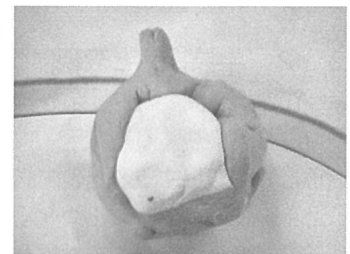


図3 中身と皮の色が違う南瓜

手分けして、誰が何を

を作るか相談して作

った。1学期に紙粘土に

絵の具を混ぜて色粘土に

する学習をしていたので、

どの絵の具をどのぐらい

混ぜたらいいのかわからな

い。作りたい色にするには、

何色と何色を混ぜるのか、友だちや

教師に相談して制作した。

第2次 1Aおいしい秋を考えよう

・作って食べたい秋の料理は

シチュー カレー おでん 鍋物 芋のてんぷらなどから、圧倒的多数でカレーが選ばれた。

3. 2. 5. 1A秋カレーをつくろう

○1A秋カレーを考えよう

4人組で、「おいしい秋カレー」を考えよう

制作した紙粘土の秋の食材を、紙に書いた鍋の中に入れて、どれを入れるか話し合った。



図4 鍋の絵を囲んで話し合い

はじめの話し合いでは、「果物ば

かり」「何もかも入れている」「隠し味だけ」…と、テーマから離れてしまい、なかなかまとまらなかった。

いくつかのグループの途中経過を

そこで「おいしい秋カレー」ポイントを確かめた。

- ・そのまま食べた方がおいしいもの
- ・カレーに入れるとおいしくなりそうなもの
- ・他の料理の方が合いそうなもの
- ・「おいしい秋」がテーマ 秋の食材
- ・隠し味でオリジナル
- ・考えたカレーには名前を付けよう

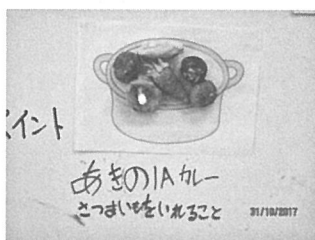


図5 小集団で考えをまとめた

○めざせ 投票一位

「投票で一位になったグループのおいしい秋カレーをみんなで作ろう！」

8グループ8種類のカレーが出そろった。

投票の結果、一位は決まったが、自分たちで考えたカレーには愛着があり、「自分らの作りたかったあ。」の声に、8グループがグループごとのカレーを作ることにした。

○1Aおいしい秋カレーづくり

カレー作りに先がけて学級園のサツマイモを掘り出した。思いの外大きく育っていて、「これをカレーに入れるんや。」とカレー作りへの期待感が高まった。

カレー作りの日、保護者の生活科ボランティアの方の協力を得、8グループ分のカレー作りを実施した。

誰もが自分のカレーにどの食材が入るのか、ちゃんと覚えていた。

できたカレーは、お弁当箱に入れて縦割り昼食会に持参して、それぞれが楽しむことにした。解散する前に別のグループの味見タイムで、味見をした友だちが「おいしい。」と言うと、「よっしゃあ。」とガッツポーズする子どもたち、自信のある表情だった。



図6 実際にカレー作り

保護者による生活科ボランティアの感想を伺うと、「8グループとも全く味が違って驚いた。同じルウで作っているとは思えない。」「サンマの味噌煮缶入りは、コクがあってとてもおいしかった。」「いつも同じような食材で作っているけど、いろいろやってみようと思う。」など、子どもたちの自由な発想が成功していることに驚いていた。

○季節とくらし

日本には四季があり、季節にあわせた暮らし方が日本の文化を作っている。今後も、季節に合わせた暮らしに注目した学習を続けたい。

4. 授業の考察

今まで秋探しという時、自然の変化の中から秋を探すことが多かった。自然の変化に合わせて、装いや食べ物などが変化することに注目し、今回は「食」を中心に、単元構成をした。

スーパーで見つけた秋の食材を、実際に紙粘土で作るという表現活動により、一つ一つの食材への関心が高まった。これは、逆に自分が制作した秋の食材は、「1A秋カレーに絶対入れたい」という強い思いにつながった。

また、各家庭で「お家カレーのお勧めポイント」をインタビューしたことは、社会科の一人調べ、一人学習の初歩である。この活動により、「隠し味」が話題になったり、家で一緒にカレーを作ったりして、生活科の「家族の学習」へのつながりが生まれた。

5. 成果と課題

少人数での話し合いの進め方として、初めは任せ、途中で自分たちの考えを振り返らせた。この振り返りにより、話し合いのポイントを示したことで、話し合いの方向性が明らかになり、子どもたちにとっても納得のできる話し合いになった。

人気投票をして「1Aおいしい秋カレー」を決定し、それをみんなでつくって食べようというのは、真剣に考える動機付けとして有効であった。しかし、実際には、1番人気のカレーを全員で作るのではなく、それぞれのグループが考えたカレーを作ることにした。それは、予定外のことだったが、より思いの強いカレーになり、その後、家庭でも作ったという声も多く、それぞれ作ったことが結果的には功を奏したようだ。

中には、あまり秋を感じないようなカレーもあったが、考えること、活動することが生活科であり、答えを導くことは重要ではない。

本校栄養教諭の神山教諭の協力により、食育のねらいも視野に入れることができ、感謝している。

参考文献

文部科学省(2008)[小学校学習指導要領解説 生活編]文部科学省